

メタファーの研究は何のために？

—メタファー研究が面白く、かつ重要である本当の理由について—

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

Revised on 08/13/2008; 11/13, 09/12, 06/23, 03/27/2007

1 はじめに

メタファーに興味をもつ研究者は多い。特に認知言語学の分野では、ほとんどそうだとはいいほどだ。だが、それは見方を変えると、認知言語学ではメタファー以外の意味現象に—特に非メタファー的意味がどうして理解できるかに—あまり関心が払われていないということでもある¹⁾。それは果たして望ましいことなのだろうか？

私としては、メタファーは確かに、それ自体として非常に面白い現象だと思うが、その研究の本来的な意義を理解せず、いつまでも「これはオモシロイ!!」のレベルに留まって研究を続けることは、芸能人のゴシップ好きと同じ興味本位のレベルにあると思われる²⁾。

¹⁾ 特に次のことは問題である: 私が見る限り、非メタファー的意味がどうして理解できるかは、認知言語学でも所与のことか、自明な事柄だと考えられている節がある。実際、メタファーの研究が隆盛であることは、この楽観視の裏返しである。

認知言語学の意味研究もう一つの明らかな難点は、その対象が前置詞、後置詞、動詞などの機能語に偏りすぎているということである。十分に網羅性のある一般名詞の意味論は、認知言語学でもほとんど試みられていない。機能語類の意味記述は「難しい」と考えられているから自然とそうになっている可能性は高い。だが、それでは一般名詞の意味記述はこれらに較べて本当に「簡単」なのだろうか？これは非常に怪しいと思う。

一般に言語学者は名詞の意味に関心をもたない—私の知る限り、例外はフレーム意味論 (Frame Semantics) [1, 2, 3, 4, 5] ぐらいである。それに関心をもつのは、知識表現や人口知能の研究者が多い。これは明らかに何かの現れであろう。

²⁾ 私はここで「興味本位が悪い」と言っているのではない。それは「浅い」と言っているだけである。

このような問題意識から、この試論ではメタファー研究が本当に重要である理由について、個人的な見解を述べる。メタファー研究が興味深いのは、〈異常〉としてのメタファー (的意味) が〈正常〉としての非メタファー (的意味) への重要な洞察を含むからであるというのが私の主張である。

2 メタファー研究が重要である本当の理由

2.1 基本的主張

私はこの試論で次の二つのことを示したい:³⁾

- (1) 語 (句) w が文 S 中でメタファーとして使われるとき,
 - a. w のメタファー的使用は異例 (exceptional) ではない。
 - b. だが、 w の意味は異常 (aberrant) — 厳密には逸脱したもの (deviant) — である。
- (2) 文 S にメタファーの効果が認められる時、概念メタファー (conceptual metaphors) [9, 10, 13, 8] をもち出す前に説明されるべきなのは,
 - a. S 中 (か S を含む文脈内) で、 w の用法がその「本来の用法」(≈ 文脈から w に対して「期待」されている意味) からズレていることをヒトがどうやって検知し、

³⁾ 以前の版では、ここで次のことを挙げていたが、適切でないので、2008/08/13 に削除した:

ある文 S にメタファーの効果が認められるとき、メタファー的なのは文全体ではない。 S に含まれる、特定の語 (句) w のみがメタファー的な意味をもち、残り $S-w$ は字義通りの意味として使われる⁴⁾。

b. そのズレをどうやって解消しているかを適切に記述するモデルである

次の事実はしっかり区別される必要がある: 逸脱は、どんなに頻繁に起こり「あたり前」に見えようと、逸脱であることに変わりはない。

これによって私は [8, p. 124] で否定されている次のような主張を擁護し、概念メタファー (写像) 理論 (Conceptual Metaphor/Mapping Theory: CMT) [9, 10, 11, 12, 13, 8, 14] の主張の一つに挑戦する:⁵⁾

(3) Tenet 3: Metaphorical language is deviant. In metaphor, words are not used in their proper sense. [8, p.124]

そのためには、DEVIANT, PROPER の正確な意味を明確にする必要がある。これらをメタファー的に使ったら —Lakoff-Johnson の議論にはありがたなことなのだが— 何が説明で何が説明でないのか、めちゃくちゃになってしまう。

2.2 “非メタファー:メタファー::健康:不健康” という類比

メタファーは実際、かけ値なしに面白い現象である。しかし、その面白さが何に由来するものであるかは、あまり正しく理解されていないようだ。私が見る限り、メタファーが興味深い理由は、それが非メタファーに関して洞察を与えてくれるからである。これは多くの人には意外に聞えることかも知れないが、それは不健康や病気が健康に関して様々な洞察を与えてくれるのとまったく同じ理由によるものである。

2.2.1 〈健康〉に関する逆理

世の中には「健康の逆理」とでも読んでよいものが存在する。具体的には、

(4) 健康の逆理:

- a. 〈心身の正常な状態〉としての〈健康〉はそれ自体として直接知ることができないか、極めて難しい
- b. それは〈不健康〉という名の〈異常〉との比較、つまりその〈喪失〉との対比を通じて、より簡単に、より正しく知ることができる。

これはもう少し一般的に言うと、〈正常〉と〈異常〉の区別の問題である。正常に関する非常に多くのことが異常から学べる。というより、正常に関する非常に多くのことは、異常からでないと学べない。例えば、私たちは、最近なら脳疾患から失語症を含んだ多くの失行症の実例を学び、それから「ヒトが正常な状態にあるとはどういう状態であるか」に関して、重要な洞察をいろいろ得てきたし、それに先だって、何百年、いや何千年にも渡ってなされたきた数多くの病気の観察と治療の努力から「ヒトが健康な状態にあるとはどういうことなのか」に関して、重要な洞察を得てきた⁶⁾。それからわかったことの一つは、健康とか正常な状態というもの、それなりに頑健ではあるけれど、非常に微妙なバランスの上に成り立っているということだった。

2.2.2 〈正常〉な意味と〈異常〉な意味

これと同じことが正常な意味についても言える:

(5) 字義性の逆理:

- a. 〈意味の正常な状態〉としての〈文字通りの意味〉はそれ自体として直接知ることができないか、極めて難しい。
- b. それはその〈喪失〉によって、〈メタファー〉や〈メトニミー〉という名の〈異常〉によって、より簡単に、より正しく知ることができる。

議論の余地があるとは言え、仮に字義性の逆理が正しければ、多くの研究者がメタファーに関心を寄

⁵⁾ Lakoff-Johnson が反対するほかのメタファーに関する教義は次の通りである:

- Tenet 1: Metaphor is a matter of words, not thought. Metaphor occurs when a word is applied not to what it normally designates, but to some thing else.
 - Tenet 2: Metaphorical language is not part of ordinary conventional language. Instead, it is novel and typically arises in poetry, rhetorical attempts at persuasion, and scientific discovery.
 - Tenet 4: Conventional metaphorical expression in ordinary everyday language are “dead metaphors,” that is, expressions that once were metaphorical, but have become frozen into literal expressions.
- これらは正しい主張であり、私も特に反対はしない。

⁶⁾ 最初の医学書の一つは [15] であるが、この段階ですら健康と不健康の境界条件に関して、相当に深い考察が行われている。

せるのは、それが意味の異常な状態であり、意味の正常な状態に関して洞察を与えてくれるからだということになるし、この字義性の逆理が非常に数多くの研究者がメタファーに関心をもっている理由をうまく説明してくれると、私は思う。

もう一つ重要なのは、次の点である。メタファーに関心をもつ人々の関心のあり方は、数多くの人が一専門家か否かを問わず—精神病や人格異常に関心をもっている状態と非常によく似ている。彼らが異常自体に関心をもっているのか？という点、実はそうでもない。彼らが知りたいのは、異常そのものよりも、異常の反面として浮き彫りになる正常なのである。この点は研究者自身にも自覚されていないことが多いように思うので、強調しておくのはよいことだと思われる。

2.3 メタファーは〈異常〉ではない??

2.3.1 まずは問題設定

メタファーは異常だと言うと、[13, 8, 14]の路線に沿って研究している権威筋、あるいは[16]の読者あたりから反論が寄せられそう。曰く「メタファーは異常などではない」、あるいは「それはあたり前の現象だ」と。

実際には私の指摘したことは、メタファーが「あたりまえの現象」である点に関しては、彼らの主張することに矛盾しているわけではないのである。例えば、病気や不健康は、〈誰でも病気に罹ったことがある〉、〈誰でも不健康と健康の境界を常に行ったり来たりしている〉という意味で、「あたりまえ」で、遍在する現象である。しかし、このことは病気や不健康が〈正常な状態〉であることは断じて意味しない。遍在性と正常性は別の概念である。これらを混同してはならない。

2.3.2 正常性/異常性は程度の問題だが...

「正常とは軽度の異常である」と些か自虐的な揶揄をこめて語ったのはフロイトであったと思う。だが、この種の相対化は行きすぎてはならない。健康と不健康の境界が本質的に曖昧であることに関しては、フロイトの言ったことは軽度の異常に関しては真理をついているが、重度の異常に関してはそうではない。例えば、それは致命的な病気に関しては、

明らかに成立しない。命に係わる病気が直らなければ、人は死ぬ。直れば、人は生き長らえる。また、不健康とは原則的に不適応な状態である。条件が同じならば、健康なものは不健康なものより長く生き延びる⁷⁾。これらの違いは決定的であり、相対化不可能である。

これは認知言語学を中心に言語学会で広く受け入れられている現代的なメタファーの理論 [13, 8, 14] が説くことの間で矛盾している点である。私は次の(6)を肯定するが、彼らの理論ではそれが否定される:

- (6) メタファー表現は正常な表現ではなく、あくまでも(軽度に)異常な表現である。

とはいえ、私は次の点では、現代的なメタファーの理論が主張するところに完全に同意する:

- (7) 従来の(形式主義的傾向の強い)意味研究では「メタファー表現は異常だから無視して構わない」という誤った結論に陥りがちだが、実際にはそうではなく、その反対に、メタファー表現は異常な状態だからこそ、正常な状態に対する重要な示唆を含んでいる。

〈異常の欠如〉をもって〈正常〉を定義する方法、これは“フロイトの方法”とでも呼んでいい、非常に有効な研究上の戦略である。

だが、フロイトの方法の目的は、正常と異常を対として、一つのシステムの二面性として捉えるという点にあるのであって、正常と異常の区別を反転させることにあるのではない。現代的なメタファーの理論が意味の正常と異常の関係を無に帰するか、あるいはそれを反転させるなら、それは誤りである。

2.3.3 Lakoff & Turner (1989) の見解の批判的検討

Lakoff & Turner [14, 邦訳 p. 135] に次のような一節がある。

⁷⁾ 実際には、マラリアの蔓延する環境とそれに対する適応としての鎌形赤血球性貧血症との関係—この適応は異形接合体有利という点で非典型的である—があったりして、事態はそれほど単純ではないが。

(8) 文字通りの意味説は言葉の「正しい」用法という概念をともなっている。つまり「正しい」用法のもとでは言葉は文字通りの概念、すなわち自律的で現実世界の何らかの自体を規定しうる概念を指し示すという考えである。ここにいう命名説によれば、隠喩とは言葉が「正しく」意味するものとは別のものを指す用法と言うことになる。したがって隠喩なるものは言葉の単なる用法の問題、しかも不適切な用法に過ぎないということになる。

これは「文字通りの意味説」とその変相に対する批判の一つであり、特に「命名説」への批判であるが、明らかに Lakoff (と Turner) の議論は混乱していると私は思う。

一つハッキリしているのは、彼らの主張に反して、「正しい用法」というもの—「正しい」という限定の意味が“真実を表わす”という意味ではなくて“もっとも自然で中立的である”という意味で—少なくとも語句の“本来的な用法”というものは存在する、ということである。ただし、この場合、「正しい」の意味は「本来の」であり、その反意語は「誤った」ではなく「逸脱した」「ズレた」である。

実際、本来的という意味で“正しい”用法、あるいは意味が存在しなかったら、そもそも子供はコトバの意味を学べるのだろうか?? 文字通りの意味というものが十分になくなってしまったら何が起こるのか? 用法基盤 (usage-basedness) という土台が成立するのか? — そういう派生的だが本質的な問題のことを、Lakoff (と Turner) は少しでも真面目に考えたことがあるのだろうか???? と私は疑問に思わざるを得ない。

これは単に意味が身体性を基盤にもつを言えば解決する問題ではない。身体性は、難問を雲散霧消させる便利な「おまじない」ではない。

2.3.4 自己破滅的な相対主義を避ける必要性

私は—例えば生態心理学 [17, 18, 19] の知見を取り入れる限り—Lakoff (と Turner) の貧弱な想像力以上にコトバの意味は客観的基盤をもっていると想像するが、“正しい用法”を純粋に客観的基盤で定義することは、彼らが指摘するように不可能だろうということに同意する。言語 (の使用) の本質は「他人に話が通じること」であり、それを保証するのは本

質的に慣習だからである (これは de Saussure 以来の言語学の常識のはずだ)。慣習には客観的な基盤はない。

だが、それとは関係なく“正しい用法”というものは存在する。この場合、“正しい”とは“もっとも慣習的な”ということである (が、些か厄介なことにこの意味での慣習性は、慣習的メタファーの慣習性と同じ意味をもつものではなく、“もっとも文脈内の期待に合った”という意味である)。実際、“もっとも文脈内の期待に合った”という意味で“正しい”用法が存在するかどうかと、その意味が客観的な意味かどうかという問題は質の異なる問題で、これらが混同されていること自体、彼らの議論が破綻していることを如実に表わしている。

ただ、Lakoff (と Turner) の主張を少し好意的に考えると、問題になっているのは単に用語法の問題、つまり単に“正しい用法”という表現が何を意味し、何を含意するのかという解釈の問題である可能性が高い。だとすれば、彼らの「正しい用法は存在しない」という主張は、なおさら真に受けるべきではない。

用法が“正しい”とは正確に何を意味するのか吟味する必要がある。“本来の”という意味で“正しい”用法が存在しなかったら、そもそも意味を理解できるということ自体が説明できないであろう。それとも「ありとあらゆるものがメタファーだ」とか主張する気なのだろうか?

私は、メタファーと非メタファーの区別は研究者のメタファーの定義に拠らない、自然的な区別だと見なすので、メタファーと非メタファーの区別が非本質的であると論じるようなまやかしは自己破滅的な相対主義だと見なし、まったく価値を認めない。

2.3.5 ヒトの知性の「自然」的基盤

Lakoff (と Turner) が毒されている言語学者の相対主義的傾向に対し、一本釘を刺しておこう。S. Pinker [20] のような研究者とは異なり、ヒトの心が自然選択 (natural selection) ではなく性選択 (sexual selection) によって進化したと唱える進化生物学者/心理学者の G. F. Miller は次のように言う:

- (9) 人類学者が、美の基準などは文化によって気まぐれに変わり得るといふとき、彼らは間違った形質を間違った方法で研究しているのだ。異なる文化に属する人々は、みな異なる皮膚の色を好んでいるが、誰もが、清潔で、滑らかで、しわのない皮膚を好んでいる。女性は、どのぐらいの背の高さの男性を好むかではそれぞれ異なるが、ほとんどの場合、自分よりも背の高い男性を選んでいふ。民族が異なると好まれる顔形の造作も異なるが、誰もが、その集団の平均に近く、左右対称な顔を選んでいふ。正しいレベルで見るとしなくてはならぬ。人間の美に世界共通の基準を見つづけることはできないだろう。[21, 邦訳(第二巻), p. 6]

これはチョムスキー学派の言語学者、心理学者が唱える普遍文法の主張と同列の単なる普遍性の主張と同じではない。無用な誤解を招かないように、関連する議論を引用しておこう:

- (10) ...人間は、他のどんな人工知能プログラムよりも、また他のどんな霊長類よりも、美術を生み出したり判定することにすぐれている。もちろん、すべての人間が言語能力を持っているからこそ、異なる文化においてそれぞれ別の言語を習得することができるのと同じように、すべての人間が美術の能力を持っているからこそ、異なる文化において、それぞれ異なる個別のテクニックや美的スタイルを、習得することができるのである。他のほとんどの人間の心的適応と同様、美術を生み出し、それを理解する能力は、生まれたときからあるわけではない。そういう意味では、私たちの心理の中で、「生得的」であるものはほとんどない。なぜなら人間の赤ん坊には、やらなくてはならないことがあまりないからだ。遺伝的進化による適応は、生存と繁殖の特定の段階に対処する必要が生じて初めて出現してくるのである。ひげは進化したけど、それが生えてくるのは思春期以後である。それでは、ひげは「生得的」なのだろうか。閉経は「生得的」なのだろうか。「生得性」は、現代の進化生物学や行動遺伝学ではあまり意味のない言葉である。[21, 邦訳(第二巻), p. 8] (ボールド部分は私の強調)

以上の簡単な注意の下で、本論に戻ろう。

- 2.3.6 “正しい”用法の説明は困難だが必要である
重要なのは、正しい用法の存在を認め、それが正しいことの理由を見つづける必要があるという点である。現在のところ、CMT はそのような必要性を認

めず、積極的になし崩しにしようとする。

私は非常に疑問に思う: 正しい用法の存在を認めないで、彼らはどうやってメタファーと非メタファーの区別を認定するつもりなのだろう? メタファー性のない表現が(使用される文脈によって)メタファー性を獲得することを彼らはどうやって説明するつもりなのだろう?

Lakoff (と Turner) の議論では、メタファーは経験科学の対象というより、メタファーは何か超越論的(transcendental)な存在に祭り上げられている—というより貶められている。これは Chomskians が統語論を超越論的存在に仕立て上げるやり方と、実証的、科学的言語学の破壊であるという点で、実質的に変わらない。

「メタファーとは概念領域間の写像である」と定義するのは彼らの自由だが、そもそも概念領域間の写像が起こっていることは、どうしたら検出可能なのだろうか? その検出がメタファーの定義自体に依存し、メタファーの定義から独立したメタファー性の検出法が伴わないならば、そのメタファーの定義は実質的に「わたしたちはこれこれのモノをメタファーと呼ぶ。それ以外は定義によりメタファーではない」と独断的に宣言しているのと同じことである。このような循環的なメタファーの定義に基づいたメタファーの説明は自己成就的で反証不能であり、経験科学的な価値は無に等しい。

2.3.7 形式主義に対する過剰防衛

だが、Lakoff (と Turner) は次のように続ける:

- (11) この立場による限り、隠喩は概念構成の上で何の役割ももたないという誤った結論に達してしまう。すなわち隠喩は推論や概念化、また事象の理解のうへで全く用いられることのないものと見なされてしまうのである。

この荒唐無稽な結論は、どこから来たものなのだろうか??? このような奇妙な結論を導けるのは、ただただ「正しい用法でなければ、価値がない」という誤った想定か、あるいは形式主義への敵意、あるいは恨みに端を発する過剰防衛であるように私には

思われる⁸⁾。

用法の正しさ — 正確には用法の本来性との一致度 — は、その使用価値とは別物である。日頃から邪険に扱われている相手に私が皮肉で「キミはいつもやさしいよね、まったく」と言うとき、これは Lakoff & Turner の言う意味では“正しくない”。なぜなら、私は相手をやさしいなどとは思っていないのだから。そして、相手にチャンとした意図検出能力があるならば、私の言い方から相手はそのことを知るはずである。

これは確立したコトバの使い方である。このようなコトバの仕様に対し、「それは“やさしい”の誤った使い方だから、意味がない」「価値がない」などと、いったいこの誰が言うのだろうか？ それは Lakoff (と Turner) の単なる被害妄想ではないだろうか？

重要なのは、聞き手は私が「キミはいつもやさしいよね、まったく」と言うとき、私がそれを文字通りの意味では言っていないということをちゃんと知っているし、実際、そういう検知が相手に可能であるように、私はわざと音調も変え、「まったく」のような当てこすりマーカもつけているのである。このような発話形式の加工は「この“キミはやさしい(よね)”は本来の意味、正しい意味では使っていないよ。そこのところ、チャンとわかってね。誤解しないでね」というメタメッセージをコードするため以外の何のために行われうるのだろうか？

2.4 理解の多元性

論点はこういうことである：理解は一枚板ではないし、伝達もそうである。つまり語句の“文字通り”の、“本来の”、“正しい”意味を目的に応じて、つまり使用状況に応じて上書き (override) できることが、ヒトのコトバによるコミュニケーションの卓越したところなのではないのだろうか？⁹⁾

この意味では、Lakoff (と Turner) が先に引用した主張は、「コトバの用法は正しい用法か、さもなければ誤った用法か」という形で、コトバの意味や用法の正しさの誤った二者択一を迫るものであり、その論法が依って立つ基盤は、このようなメタレベルの意味操作を認めない、一枚板なものである。先に引用で見たような字義通りの意味の過小評価、メタファーの意味の過大評価は、そのような単純化につながるものであり、そのようなものが正しい意味理解のメカニズムの解明につながるとは、私にはどうも思われない。

2.5 CMT に欠けているもの

CMT には根本的に欠けているものが一つある。それはコミュニケーション上のメタファー表現の使用価値に関する洞察である。コミュニケーションは話し手と聞き手の間の相互的利益の成立が不可欠であるという意味で、明らかに経済活動の一種である¹⁰⁾。従って、メタファーには聞き手だけでなく、言い手の側から見た際の利用価値があるはずなのに、CMT はそれをまったく問題にしないでメタファーの「原理」を論じている。それは実際、あまりに空虚なメタファーの説明理論なのである。

3 終わりに代えて

3.1 メタファーと非メタファーとの境目

非メタファーとメタファーの境界は本質的に曖昧である。それは、健康と不健康の境目、正常と異常の境目が本質的に曖昧であるのと同じである。

だが、この事実の意味を取り違えてはいけない¹¹⁾。これはメタファーと非メタファーの区別が存在しないということは意味しない。健康と不健康の区別は曖昧ながらも存在するし、正常と異常の区別も曖昧ながらも存在する。同じ理由で、メタファーと非メタファーの区別が存在しないはずはない。そうでな

⁸⁾ Lakoff の客観主義への燃えるような敵意は、おそらく Linguistics Wars [22] 時代の Chomskians との血みどろの論争の後遺症であると思われるが、個人的な恨みが度を過ぎ、知的な誠実さと両立しないようになったら、研究者としてはお終いである。

⁹⁾ 意味の交渉 (negotiation of meaning) [23] の場面では、こういうことがあたり前に行われているのだが、それは Lakoff 派の研究者の眼中にはないらしい。

¹⁰⁾ この意味での「経済」が例えば [[SPEAKING IS SPENDING MONEY]] や [[EFFORT IS MONEY]] のような概念メタファーの産物かどうかは、どうでもよい。

¹¹⁾ このような取り違えの傾向は残念ながら、認知言語学の議論に顕著である。私はこの傾向を「程度の問題」症候群と名づけ、それが現在の認知言語学の非科学性の源泉であるという理由から、強く批判してきた [24]。

ければ、人が「あ、これはメタファーだ」などと気づくはずがない。そうだと気づくのはメタファーでない場合があるからである(さすがに Lakoff 自身も非メタファー的意味が存在することは認めている)。

しばしば誤解される点なのだが、これとメタファーと非メタファーの区別が連続的だという点との間に矛盾があるわけではない。確かに、メタファーは非メタファーからそれほど明瞭に区別はできないものである。次の例を見て欲しい:

- (12) 今日も彼は大きな足取りで、自分の新しい
 { i. 仕事場; ii. 任地; iii. 戦場; iv. 領地; v. 領土;
 vi. 陣地; vii. 城 } に向かった。

この例で、〈仕事場〉、〈任地〉を除く〈戦場〉、〈領地〉、〈領土〉、〈陣地〉、〈城〉はいずれもメタファーであるが、語句ごとにメタファーの種類が異なるだけでなく、メタファー性の程度も異なる。これは歴然たる事実であるが、現代的なメタファーの理論の主流であるメタファー写像の理論 [13, 8] はメタファーの種類、正確にはその背景となる概念構造の別を指定できても、メタファー性の程度の差が表わせない。それは主流の理論がメタファー(性)を説明するのにメタファー写像 (Metaphorical Mapping) を前提としているからである¹²⁾。

3.2 メタファーの存在を自明化しないことの必要性

メタファー写像の理論において、メタファーの存在は所与のもの、自明なものであるという意味において、メタファー写像はメタファーの存在の自明化 (trivialization) であることに注意されたい。なぜそれが成立するかを不問にしたまま「メタファーは異なる領域の間で成立する写像である」と言った瞬間、異常現象としてのメタファーは〈異常〉でなくなり、自明な現象になっている。これはメタファーの背後にある異常性の自明化である。

確かに「メタファー写像の成立基盤は経験的基盤

である」とか「メタファー写像の成立基盤は身体的経験的である」と「説かれる」。これは一部の人には説明に見えるようだが、これは単なる教説であって、経験的基盤、身体的基盤という未定義の概念自体がしっかり定義され、解明されない限り、実質がない。実際、メタファー写像の成立基盤を安易に身体性に訴えて「説明」することは、結局は「メタファー性はどこから来るのか?」という本質的な謎を、身体的基盤、経験的基盤のような、いかにもありそうな未知の領域に押しつけているだけである。だが、これは身体的基盤、経験的基盤そのものが解明されない限り、「知的タライ回し」以外の何ものであろうか? 身体的基盤、経験的基盤の解明に取り組んでいるようには、私にはとうてい思えない。そればかりか、Lakoff などは、その解明に有益であると考えられる生態心理学には、はっきりと否定的な立場を採っている [9, pp. 215–217]¹³⁾。

3.3 概念メタファーは記述的一般化以上のものではない

概して言うと、メタファー写像は記述的一般化としては正しいが、それ以上のものではなく、それ自体ではメタファーという現象の存在論的説明には繋がらない。メタファーの類型論が精緻を極め、メタファーのパターンが調べ尽くされたところで、それはメタファーの発生する理由の解明ではない。メタファーと病気とのアナロジーを続けるならば、こうも言える: 病気の類型化は、どんなに緻密なものであろうと、それ自身は病気の原因の解明 —特にそ

¹³⁾ Lakoff は次のように断定する:

... But Gibson's work was on perception, not on cognition. And there is an aspect of Gibson's psychology of perception that appears not to extend to cognition." (Lakoff [9, p. 215]) ... But in this realm of cognition, ecological realism cannot account for most of the examples in this book." (Lakoff [9, p. 217])

ついでに言っておくと、Lakoff の次の発言 [9, p. 216] はアフォーダンスと環境の概念に関する、彼の完全な誤解を露呈するものである: "Another problem is that the Gibsonian environment is monolithic and self-consistent and the same for all the people." (Lakoff [9, p. 216]).

Reed [18, p. 26] はこのような読み違いがアフォーダンス理論を理解していない多くの人々に「典型的な誤り」であることを指摘している。アフォーダンスは生命体に共通だが、それを利用できるか否かには大きな種差、個体差がある。これは種や個体にとって、環境が異なったものであることを意味する。

¹²⁾ 「メタファーは非メタファーと連続的だ」と言うのは容易だが、それはメタファー性の程度を量として表わさない限り、説明ではない。この点は [25, 26] に詳しく論じられている。

の診断や治療—には結びつかない。

実際、CMTが記述的一般化としてのメタファー写像に、メタファー写像の心理的実在性を読み取るならば、それは単なる原因と結果の混同、別名第一次同型性錯誤 (first order isomorphism fallacy) [27] を犯している可能性が高い。

3.4 メタファーの真の説明理論のための条件

逸脱は存在しないのではなく、気づかれただけとすると、私たちが本当に必要とするメタファーの理論は、「語の使用における意味のズレ=逸脱が、いつ、いかにして、どの程度発生するか」に関する理論である。とすれば、おそらくメタファー写像の理論はそのような理論と生後性をもつように組立直す必要があるだろう。これには二つの条件がある。

3.4.1 メタファー性の程度(の差)の表現の必要性

そのために必要な多くのことの一つは、メタファー性の程度(の差)を何らかの指標によって表わすことである。

メタファー性の程度(の差)を表わせるなら、今度は語が(理想的な意味で)本来の意味からズレている場合には常時(微量の)メタファー性が生じていて、そのズレが一定値より大きくなると、それが領域の違いと感じられると考えることが可能になる。私にはこの考え方が、「メタファーは異なる領域の間で成立する写像である」と単に理論的な定義を与えるよりも経験的妥当性をもつと思う。実際、離散的な性質の問題から連続量の測定と評価の問題に変換できれば、多変量解析なでの多くのすぐれた科学技術が使えるようになる。これは人文系の研究にありがちな定性的な定義から派生する果てしない論争の循環から脱却するのを可能にするだろう。

3.4.2 メタファーを軽度の〈異常〉として定義する必要性

これが意味するのは、メタファーを非メタファーから区別するための、(操作的)条件を特定する必要があるということである。それは実際、メタファーの研究にとって本質的に重要な問題の一つである。それは不健康を健康から区別する条件を特定すること、ある病気を定義することと同じくらい重要な課題である。

だが、意外なことに、この問題意識で現在メタファー研究を進めている研究者は、言語学者には滅多にいない。

参考文献

- [1] C. J. Fillmore. Frame semantics. In Linguistic Society of Korea, editor, *Linguistics in the Morning Calm*, pp. 111–137. Hanshin Publishing, Seoul, 1982.
- [2] C. J. Fillmore. Frames and the semantics of understanding. *Quaderni di Semantica*, Vol. 6, No. 2, pp. 222–254, 1985.
- [3] C. J. Fillmore. “Corpus linguistics” or “Computer-aided armchair linguistics”. In J. Svartvik, editor, *Directions in Corpus Linguistics: Proceedings from a 1992 Nobel Symposium on Corpus Linguistics, Stockholm*, pp. 35–60. Mouton de Gruyter, 1992.
- [4] C. J. Fillmore and B. T. S. Atkins. Towards a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors. In A. Lehrer and Eva F. Kittay, editors, *Frames, Fields and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*, pp. 75–102. Lawrence Erlbaum Associates, 1992.
- [5] C. J. Fillmore and B. T. S. Atkins. Starting where the dictionaries stop: The challenge for computational lexicography. In B. T. S. Atkins and A. Zampoli, editors, *Computational Approaches to the Lexicon*, pp. 349–393. Clarendon Press, Oxford, UK, 1994.
- [6] R. W. Langacker. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press, 1987.
- [7] R. W. Langacker. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Applications*. Stanford University Press, 1991.
- [8] G. Lakoff and M. Johnson. *The Philosophy in the Flesh*. Basic Books, 1999.
- [9] G. Lakoff. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, 1987. [邦訳: 『認知意味論』(池上嘉彦・河上誓作訳). 紀伊国屋書店.]
- [10] G. Lakoff. The invariance hypothesis: Is the abstract reasoning based on image schemas? *Cognitive Linguistics*, Vol. 1, No. 1, pp. 39–74, 1990. [邦訳: 不変性仮説: 抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか? (杉本孝司訳). In 坂原茂(編), 『認知言語学の発展』, 1–59. 東京: ひつじ書房.]
- [11] G. Lakoff. Contemporary theory of metaphor. In A. Orthony, editor, *Metaphor and Thought*, pp. 202–251. Cambridge University Press, 2nd edition, 1993.
- [12] M. Johnson. *Body in the Mind*. University of Chicago

- Press, 1987.
- [13] G. Lakoff and M. Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 1980. [邦訳: 『レトリックと人生』(渡部昇一ほか 訳). 大修館.].
- [14] G. Lakoff and M. Turner. *More than Cool Reason*. Chicago: University of Chicago Press, 1989. [邦訳: 『詩と認知』(大堀壽夫 訳). 紀伊国屋書店.].
- [15] ヒ(ツ)ボクラテス. 古い医術について(他八篇). 東京: 岩波書店. 小川政恭(訳). 岩波文庫青 901-1.
- [16] G. R. Fauconnier and M. Turner. Polysemy and conceptual blending. In B. Nerlich, Z. Todd, V. Herman, and D. D. Clarke, editors, *Polysemy: Flexible Patterns of Meaning in Mind and Language*, pp. 79–94. Mouton de Gruyter, Berlin/New York, 2003.
- [17] J. J. Gibson. *Ecological Approach to Visual Perception*. Lawrence Earlbaum Associates, 1979. [邦訳: 『生態学的視覚論』. 古崎ほか(訳). サイエンス社.].
- [18] E. S. Reed. *Encountering the World: Towards an Ecological Psychology*. Oxford University Press, 1996. [邦訳: 『アフォーダンスの心理学』. 細田直哉(訳). 新曜社.].
- [19] 佐々木正人. アフォーダンス: 新しい認知の理論. 岩波科学ライブラリー, 1994.
- [20] S. Pinker. *How the Mind Works*. New York: Norton, 1997. [邦訳: 『心の仕組み(上, 下)』(椋田直子訳). NHK ブックス].
- [21] G. F. Miller. *The Mating Mind: How Sexual Choice Shaped the Evolution of Human Nature*. New York: Brockman, 2000. [邦訳: 『恋人選びの心(I, II)』(長谷川真理子 訳). 岩波書店].
- [22] R. A. Harris. *The Linguistics Wars*. Oxford University Press, New York, 1993.
- [23] E. Wenger. *Communities of Practice: Learning, Meaning and Identity*. Cambridge University Press, 1999. [邦訳: 『コミュニティーズ・オブ・プラクティス: ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』. 櫻井 祐子(訳) 翔泳社.].
- [24] 黒田航. 認知(科学的)に妥当なカテゴリー化の(計算可能)モデルの提唱: 「放射状カテゴリー構造」と「クラスターモデル」を越えて. 日本認知言語学会第5回記念大会 Conference Handbook, pp. 57–60. 日本認知言語学会(JCLA), 2004.
- [25] 黒田航, 野澤元. 比喩理解におけるフレーム的知識の重要性: FrameNet との接点. [COE21 ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」のための研究論文 <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames.pdf>], 2004.
- [26] 黒田航, 野澤元. COE21 ワークショップ「メタファーへの認知的アプローチ」での口頭発表の際にフロアから出た質問に対する公式回答. [<http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/metaphor-and-frames-replies.pdf>], 2004.
- [27] P. Kugler, M. Turvey, and R. Shaw. Is the cognitive penetrability criterion invalidated by contemporary physics? *Behavioral Brain Science*, Vol. 5, pp. 303–306, 1982.